

神のおとずれ

日本聖公会 神戸教区報

2018年
12月号
クリスマス号



発行所
神戸教区事務所
TEL 078(351)5469
FAX 078(382)1095
<http://www.nskk-kobe.org/>

発行責任者
司祭 小南 晃

印刷所
文明堂印刷所

心を開いて

司祭 ダビデ 林 和広

揺さぶられる

「本当のクリスマスの意味とは？」。神学生の時、説教の演習も含め、思い巡らすことがありました。浮かれ気分では本物のクリスマスの祝いとならないと自分を戒め、肅々と過ごすような雰囲気醸していたのでしようか、ある老司祭はニコニコしながら「喜びの日ですからねえ、あまり厳しいお話してもねえ」と一言。時が経ち、ある冬季実習の際に指導聖職と神学的な話となつた際に「マリアとヨセフの物語を深く理解し、心底味わうためには、誰かを心から想う経験がなければなあ」と一言。気が振り返れば幼児洗礼を経て

キリスト者とされた私ですが、小さな頃は頻繁に教会へ家族と行っていたものの、中学2年生の時、親元を離れての寮生活を始めてからは教会との関係は薄れていきました。クリスマスと言えば、小さな頃の深夜礼拝の記憶が微かにあるだけで、寮生活時代、大学時代、会社での仲間たちと遊んだクリスマスの方が鮮明な記憶として残っています。そんな自分が神学校に入り、クリスマス、主の御降誕という出来事に目を注ぎ、学ぶことに身を置くことになりました。「受肉」とか「貧しさの中にお生まれになられた神の子」などと、専門用語や高尚に感じるような言葉



に飲み込まれて、その意味や核心をとらえきれないままに尊大な気分になっていたのでしよう。大先輩からの優しくも核心をついた助言を頂いたのです。神学的な意味や専門用語を学ぶ必要はありませんが、私の考え方や物の言い方は上っ面を撫でる程度のものでした。今もお、それが払拭できていない自分がいるのです。...

私たちが自身の人生と重なる

イエスさまの誕生物語を描いた映画「マリア」では、イエ

スさまの誕生に至るまでのヨセフ、マリアの葛藤が描かれています。貧しく暮らすマリア、明るい未来を描くことができないマリアの姿があります。想像もしない状況に置かれるヨセフの姿があります。天使からのビジョンを夢の中でちらりと見たヨセフですが、住民登録のために身重のマリアとのベツレヘムへの旅の途上で神さまへ目に見えるしるしを求めます。ヨセフとマリアが道中で出会った羊飼いや夢や希望を持って生きている人でした。遥か遠い国から星の導きに導かれて旅した東方の三博士たちの一人ガスパールは懐疑的で不平を並べます。みんな喜んでウキウキしている情景などどこにもなく、苦勞の中、葛藤や不安、不平を抱きながらイエスさまがお生まれになった場所へと向かいます。その旅路の中で互いに支え合う姿があります。人間の現実があります。その現実の中でイエスさまの誕生、その喜びという出来事があります。

この場面に登場するヨセフ、マリア、羊飼い、東方の三博士たちの体験は、私たちが

心を開く

今、生きている中で重ねることがあります。私たちは大小様々ではありますが、日常の中で困難、不安、苦しみ、痛み、悲しみ、疑いを抱きながら生きています。自分の抱くこれらの気持ちは他者にはわからないものですが、そうした現実の暗い部分にイエスさまを通して神さまが触れてくれているということを知ることがあります。

聖書の物語は単なる物語ではなく、神さまとの出会い、神さまからの癒しを実感した人間の活き活きとした証言です。そして、その神さまは聖書の物語を超えて、今、生きています。私一人ひとりにも関わり、私たちの現実に向き合ってくれているのです。先行きが見えない、厳しい、困難な現実には見えなくても、私たちの方へ近づいて来てくださる神さまに心を大きく開いて生きていくことよって、暗闇の中で光を見出すことができるのです。

（高知聖パウロ教会牧師
ウイリアムス神学館教員）